さんかく情報局

リプロダクティブ・ヘルス＆ライツとは

vol. 5

女性の「生涯にわたる健康」と「からだと性に関する自己決定権」が保障されることは一人の人間として当然のことです。

生涯にわたる女性の健康

女性は妊娠、出産のために生涯を通じて男性とは異なる健康上の問題がたくさんあります。また、ライフステージ全般にわたって、性に関係するあらゆる健康問題に直面します。健康とは身体的なものばかりではなく、精神的・社会的な意味も持っています。

からだと性に関する女性の自己決定権

女性には子どもを産む機能が備わっていますが、だからといって子どもを産む機械ではありません。女性は、子どもを産むこと、産まないこと、また女性の体を知り、性や健康に主体的になり、自分のことを自ら決定する権利を持っています。

これからの私たちは

このように、「女性の生涯にわたる健康」と「からだと性に関する自己決定権」がリプロダクティブ・ヘルス＆ライツです。

それがわざわざ権利として確立されなければならなかったのは、女性が男性よりも劣悪な環境に置かれることが多く、女性の権利が社会に受け入れられてこなかった歴史があるからです。

男女がお互いの健康や人権を尊重し、正しく性の知識を得ることが今後の社会には必要です。

問い合わせ
男女共同参画センターラポール
☎(324)2800

第60回社会を明るくする運動

7月は「社会を明るくする運動」強調月間です

第60回 社会を明るくする運動

社会を明るくする運動とは、「犯罪や非行の防止」と「罪を犯した人たちの更生」について理解を深め、それぞれの立場で力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

犯罪や非行は、地域社会で生まれ、また、その罪を償い、更生を果たす場も地域社会にほかなりません。従って、罪を犯した人や非行をした少年の更生が円滑に行われ、かつ真に有意義なものとするためには、その人自身の更生への意欲に加え、その人を取り巻く地域社会の理解と協力が不可欠です。

「安全で安心して暮らすことができる明るい社会をつくる」ため、みなさんの理解と協力をお願いします。

問い合わせ
糸島保護区保護司会
☎(323)1755

糸島市男女共同参画審議会 委員募集

市では男女が共に支え合い、いきいきと生活できる男女共同参画社会の実現のため、市の取り組みを調査・審議する「糸島市男女共同参画審議会」の委員を募集します。

募集人員 ２人以内（任期は、委嘱の日から２年間）

報酬 一回につき
【報　　酬】4,700円
【費用弁償】2,200円

応募要件（４月１日現在）
①市内に居住または通勤、通学する20歳以上の人
②市の審議会等の委員の兼務数が２以内の人
③年６回程度、原則として平日の会議に出席できる人

応募方法 市役所人権政策課、男女共同参画センターラポールに備え付けの申込書に必要事項を記入し「男女共同参画社会についての私の考え」をテーマとした作文（800字以内）を添付して提出。（郵送、E-mailでも可）
※申込書は市のホームページからダウンロードできます。
なお、提出された申込書と作文は、返却しません。

申込期限 ７月23日（金）必着（選考は書類選考）

申し込み・問い合わせ
糸島市人権政策課　☎(332)2075
〒819-1192 糸島市前原西１丁目１番１号
E-mail　jinkenseisaku@city.itoshima.lg.jp

人権コラム

小さく見えるものこそ、たいせつにしたい

地域活動指導員
本多 典子

親の虐待

私が年を重ねてきたからだろうか、子どもを見ると無条件に「愛おしく」感じてしまう。

しかし、最近私が人生の中で一番辛いと思うニュースを頻繁に耳にする。それは肉親による子どもへの虐待である。

子どもにとって、どんなことをされても大好きで愛する存在である親。虐待されている子どもは、そんな中でも「自分が悪いから」と親ではなく自分を責めるケースが多いという。

愛されるべき親からなされる無残な行為を聞く度に胸が締めつけられる。

母性神話

母性神話というものがある。子どもを産めば、自然に母性がわいてきて、子どもの世話をしたくなるというもの。

もちろん、そのとおりと言う人もおられようが、誰しも自然に母性が備わるものでもないらしい。

最近の研究によると、小さくて弱い者を見ると「守り、世話をしたい」という母性を行動に結びつけるのは、睡眠中に作られるホルモンとそれが伝達されやすくするための経験が必要であることが分かってきた。

つまり、よく寝て、学習することが母性をつくりだすということらしい。

母性神話のように、最初からいつも、子どものことだけを考える母親は幻想にすぎないのかもしれない。

悲惨な事実

グリム童話集に「ヘンゼルとグレーテル」という物語がある。貧しい木こり夫婦の妻である継母はひどい飢饉の年に2人の兄妹を森に置き去りにする。

しかし、兄妹はそこに住む魔女を殺して宝物を手に入れ、無事帰宅するという、子どものたくましさを描いた有名な童話である。

この物語は何度となく書き換えられており、これは第7版の最終稿だそうで、この初版は悲惨な事実を示す物語であるらしい。

ヨーロッパ中世の大飢饉では、多くの子どもたちが口減らしのために実父母から森に捨てられ、あちらこちらに子どもの遺骨が散乱していたという。

弱さを補う

いつの時代も、経済がうまく回らないときは、弱い立場の者への関心は薄く、彼らの権利はなおざりにされる。強者に都合のいいことだけが優先され、ストレスは弱い者に発散される。子どもはまさに、その犠牲にされるしかない。

経済不況の真っただ中にある今、時代に翻弄されるのではなく、このようなときこそ意志を持って力のない者に目を留めることを選び取りたい。

また、自分の困難を弱い者にぶつけることしかできない者も支えることができる私たちでありたい。

人間は社会的な存在で、弱さはお互いを補うことによってのみ強くなるのではないかと思う。尊い一つの命をたいせつにする私たちでありたい。